

役場の対人援助論

(51)

岡崎 正明

(広島市)

家族の風景

家族はスバラシイ？

福祉の現場で仕事をして20余年。

児童、高齢、障害、精神保健。いろんな分野で働き、いわゆる当事者という人々の支援や応援に携わってきた。それぞれの現場で特色や違いがあったが、どこにいても変わらなかったこと。

それが「家族」の存在である。

どんな当事者にも家族があり、仮にその場に登場しなくても、その存在を意識しないで支援に関わることはなかったように思う。

そういえば最近では学校や保育園で、「母の日」や「父の日」に関連した取り組みをしないとか、運動会での食事を家族ととらない所も増えていると耳にする。多様な家族事情に配慮した結果とのことだが、その割にずいぶん浸透してきた「二分の一成人式」では、やたらと子どもに親への感謝をさせたがる感じもあって、何だか個人的にしょこない。もちろん家庭に父母がいない子も、運動会に家族が来れない子もいるが、それでイベントを無くせば解決なのか？と疑問が残る。

むしろ母の日や父の日を、さまざまな子どもにとっての「母なるもの」「父なるもの」への想いを確認するきっかけとして使うことはあっていい気がするし、運動会の食事スタイルも、より選択肢を増やせないのかなど、もっと対話をしていければよいテーマだと思う。

ただ断っておきたいが、別に私は「家族って素晴らしい！」「やっぱ家族愛よね」などと礼賛し、家族第一！家族万歳！という人間ではない。むしろ家族ってときに厄介でハタ迷惑で、それでも無視できなくて。「この人にとったら、下手に関りが無い方がいいくらいいやなあ…」と思うケースもずいぶん見てきた。良くも悪くも、当事者の持つこだわり・強み・資源・課題・願い・恨みなどの中に、「家族」というものの存在が大きく影響

することがある。そんな風に「家族」というものを見ている人間だ。

ネットの辞書で「家族」を調べると、『主に夫婦や親子という関係を中心とする近親者で構成され、互いの精神的な結びつきに基づいて、生活を共に営む最も小さな共同体』などという記載があった。確かに血縁だけが家族ではない（配偶者も養子もある）し、同居だけが家族でもない（単身赴任の父親や他県の学校に行くことももある）。現代日本の主流は夫婦・親子を中心とした同居の核家族かもしれないが、その形は原始から今に至るまで柔軟に変化しており、より多様に広がっている印象だ。

さらには「ファミリー」という言葉になると、その意味はより広範囲で弾力的に使われていたりする。例えば特定のスポーツを愛好する仲間を「サッカーファミリー」と言ったり、昔からマフィアやヤクザ映画では、強い結束をする仲間を「ファミリー」とか「〇〇一家」と呼んだり。余談だが、我がご当地広島の地元球団「広島カープ」の新井監督も、チームのことを「家族」と言い、その包容力やリーダーシップは高く評価されている。

そんなわけで、家族やファミリーという言葉は、ただの夫婦や親兄弟に留まらない、大切な結びつきやつながりを示す言葉として存在しているが、私が仕事で主に関わる「家族」というのは、より狭義のものを指すことが多い。生活を共にし、時間と環境を共有してきた人々。そこで個人が受ける影響は小さくないが、ではより良い家族、正しい家族ってなんなのだろうか？そもそも家族って、何で出来上がっているのか？何がその家族をその家族らしくするのか。20年以上関わっていても、いまだに分からないことが多い。

A子のこと

私が大学生の頃、父方の親戚のA子が3年ほどうちで同居していたことがある。

いわゆる非行少女であったA子は、学校から足が遠のき、親に反抗して自宅にも寄りつかなくなっていた。A子の親は私の父母に相談し、紆余曲折の後、A子は田舎の我が家に下宿して、町内の高校に通うこととなった。当時私の家は父母と大学生の私のほかは、猫と犬が一匹ずついるだけで、兄や姉はすでに独立しており、確かにA子を受け入れる物理的現実的余裕があった。おまけに大学生の私は友人宅に頻りに泊まりに行くような生活で、自宅には家業の飲食店を手伝う従業員もよく出入りするなど、自由で敷居の低い雰囲気も持ち合わせていた。

A子はおそらく最初はしぶしぶだったろうが、離れの個室で暮らし始め、徐々に生活に慣れていった。母はA子に毎朝弁当を作り、家業の手伝いをさせてコミュニケーションをとるなど、よい関係を築いていった。A子も苦手な勉強に取り組み、学校で友人もできるなど安定していき、高校を卒業する際には短大受験をして無事合格。我が家から下宿先に移って通学し、卒業後は就職、結婚して家庭を築き、今は子どもたちを連れて頻りに私の実家に遊びに来てくれている。先日あった父の葬儀でも、A子は親戚というよりは半分家族のような立ち位置で、それを周囲も当然のように受け入れている雰囲気だった。

A子とは小さい頃から親戚の集まりでたまに会い、公園で遊んだりもする仲だったが、あくまでも「仲の良い親戚の子の1人」であった。それが高校3年間の同居後は、他の親戚とは違う親しみや、「家族的な存在」として認識するようになった。それは父母や兄弟も同じで、A子の方も私たち家族に、特別な信頼やつながりを感じているようだった。

この現象を何と呼び、どんなメカニズムとして捉えればいいのか。言い換えるならば、人と人は、どうやって「家族」になっていくのか。うまく言語化できないが、それはおそらく、「夫婦」や「親子」とも微妙に違うもののように思えてならない。

私の家族と A 子の関係でいえば、いわゆる「同じ釜の飯を食った」ことだったり、様々な生活場面を共にしたことが、間違いなく家族的なつながりを深めた気がするが、では同居していない家族はつながりが薄いのかといえば、一概にそんなことも言えない。毎日テレビ電話する家族もいるし、東南アジアや南米などの出稼ぎ労働をする人たちは、家族と離れる期間が長いが、日本人以上に結びつきが強い家族も多い印象だ。確かに同居することで共有できるエピソードが増えたり、会話の機会が自然と増えることはあるだろうが、そこは互いの意志や精神的なつながりで乗り越えられもするのだろう。

同居が家族を家族たらしめる必須のものではないとするなら、家族を家族にしていく原動力とは、一体何なのか。血のつながり？それももちろん違う。そもそも夫婦が他人同士である。では何なのか？例えば高度な知能と情緒を持った人間同士だから育まれる「共感性」や「結束力」の形だとか？確かにそれもハズしてないが、唯一無二の正解とも違う気がする。最近では墓所に行くとき一族の墓の横にペットの墓を見かけることも珍しくない。つまり、種族すら違って、家族的なつながりが生まれるというわけで、ますます分からない。

スパイス

そんなわけで答えは出ないが、ひとつだけ私の中で大切な要素と思うものがある。

それが、家族が家族らしくあるところには、「好き」とか「信頼」とか「思いやり」といった、単純なプラスの思考・感情だけではなく、「面倒くささ」とか「どうしようもなさ」とか「受け入れ難さ」とか、ある意味マイナスな感情を互いに持ち合う、葛藤とか複雑さみたいなものがある。そんな気がしてならない。

だから私はつい紋切り型の価値観で、家族や親子を語るニュースとかドラマに反応してしまうクセがある。オリンピックを目指す親子鷹。早くに親を亡くして助け合う美しき兄妹。子ども全員を有名大学に入れた母の教育論。別に当事者のことを批判したいわけではない。それぞれの家族がそれで幸せなら、外野がどうこう言うのはお門違いだ。ただ、分かりやすく消費するためだけに、大衆向けに単純な物語を流す社会。メディアの姿勢。そこにはどうしても反発したくなる。そんなに家族って、ヒトって単純じゃない。酸いも甘いもあって、時々嫌気もさすけど好きだったり。そんな矛盾を抱えているのが、家族のリアルじゃないだろうか。

思えば A 子とも同居時代に何度か感情的な対立や、イラ立ちを覚えることがあり、喧嘩になったり距離を置いたことがあった。それは大抵たいした内容ではなく、もめるのも数時間か、せいぜい数日のことで、どちらかが謝ることもあれば、日常の中でなんとか解けてなかったことになるような、その程度の体験である。でも「たまに会う親戚時代」にはなかった共有体験だ。

そんな些末な衝突やすれ違いや誤解から、人と人は、相手と自分が違う存在で、思い通りにならなくて、ときにそれを受け入れるほかないことを学ぶのではないだろうか。そういう「異物としての他者」と共存していくあきらめのような感覚。家族が家族らしくなっていく過程には、そんな要素があるように思う。

ハナレグミの名曲「家族の風景」の歌詞に、

『友達のようにいて 他人のように遠い 愛しい距離が そこにはいつもあるよ』
というものがあるが、なるほどなあと思わされる。

確かに家族というのは、友達のように気の合う仲間が集まっているものでもないし、目的や契約で集まった会社や組織でも、趣味嗜好が合うクラブやサークルでもない。親

も子も相手を選べないように、ある意味ランダムに出来上がった集団だ（選択できるのは配偶者間のみ）。遺伝的に似ていることはあるかもしれないが、それが必ずしも関係をうまくいかせるわけでもない（似た者同士がぶつかりやすいのはよく言われること）。だから家族と話が合わなかったり、衝突があったりしても当然なわけだ。

一見バラバラな集団が、互いの不条理とか、ときに見せる可愛さとか、いい加減さや真面目さ、優しさや迷惑を分かち合いながら、日々を営むことで生まれるつながり。絆。甘みも、苦みも、辛みも、渋みも混ざったスパイスのような、そんな複雑な味わいがあるのが家族なのかもしれない。

矛盾と不具合

私が最近仕事で出会う「児童虐待」や「家庭内トラブル」の家族では、そうした複雑性や家族の機能とは矛盾した理屈・言説に会うことがよくある。

高校入学後すぐに不登校となった息子に「行かないなら学費がもったいないから辞めてしまえ」「登校しないならバイトをして稼げ」と攻め立て、登校を約束する誓約書を書かせる父。

「嘘をついたら出ていく」と約束させ、嘘をついたので玄関から数時間締め出す母。

「言うことを聞かないから」

「本人がこの家にいたくないと言ったから」

「手を出してきたからこうするほかなかった」

どれも確かに一理あるし、これが家族ではなく、会社や契約関係であれば合理的で一定の正当性がある場合もあるのかもしれない。

だが残念ながら家族というのはそういう性質のものではない。なのに人はどうして、そんな言葉で説明をしてしまうのか？それは行政や社会から非難されることへのショックや傷つきが生み出す「防衛」や「反発」だったり、余裕の無さからくる思考や気持ちの「硬直化」だったり。あるいはサポートの弱さによる「孤立感」や「不安」「不満」の表れなのかもしれない。

支援者である私はそんな言説に出会うと、心の中でつい「なんでやねん！」「でも相手は子どもだからっ！」「家族なんだから！」と思いつつも、もちろんそんなことをぶつけても効果は乏しいので、違う方策を模索する。

まずは保護者なりに家族を運営しようと努力してきたことを労い、上手くいっていることを評価する。そして「家族の平穏」や「子どもの将来の自立と幸福」といった、本来の目的を確認し、手段が間違っているだけで、想いは理解できることを共有。その上で、保護者にとっての損得や、社会のルール、子どもへの効果などを冷静に話し合い、家族がやれそうだと信じられる次の一手を作り出す。そのあたりを志向している（もちろんそうそう上手くいくことではないが…）。

そしてこの家族にとって、役所や児童相談所が関わったこの出来事が、「運が悪かった」や「ケチのつけはじめ」で終わらないようにしたいと、強く思っている。できれば「いろいろあったけど、あのピンチを乗り越えたおかげで、今の家族があるなあ」「大変だったけど、結果としてよかったね」と、家族自身が主人公として語れる未来が作りたいたいと思っている。